

COG2025 応募内容確認書

ID	15-9-3
自治体名	東京都多摩市
自治体提示地域課題	日常の暮らしの中で人と人が自然とつながる機会・装置・しきけ
チーム名	ななたま原人
アイデア名	原始×現代で創る交流の場『おはなし処@多摩』たまらんない！！
チーム属性	学生：学生（ ）だけで構成されたチーム
チームメンバー数	7
代表者	宮下 紗來
メンバー（公開）	宮下 紗來, 柿沼 杏花, 河合 美空, 佐竹 友斗, 佐藤 りりあ, 中井 光姫, 長山 健太

【確認事項】

- <応募のPDFファイル名と送付先>確認しました。
- <応募内容の公開>確認しました。
- <知的所有権・肖像権>確認しました。問題ありません。

チーム名：

な な た ま 原 人

アイデア名：

原始×現代で創る交流の場『おはなし処@多摩』たまらんなんあ！！

該当する自治体名：

東 京 都 多 摩 市

自治体提示の地域課題：日常の暮らしの中で人と人が自然とつながる機会・装置・しきけ



アイデア提案書

0. はじめに

近年、対面でなくとも人ととの交流を持てるツールが増えている。そのため多摩市は多世代多分野による対面での地域コミュニティづくりを目標とし、様々な地域活動を行っている。しかし、市のアンケート調査で、市民の5割が地域活動に関心があるとしつつ、実際の活動は1割程に留まっている。このことに私たちは主に2点の課題を見出した。

① 対面での人と人とのつながりの希薄化

→スマートフォンの普及により、直接会わずSNSを通じて人とやり取りする機会は大きく増加している。その悪い影響として、ご近所付き合いの減少や言葉選びに対するモラルの欠如などが挙げられる。

② 施設内イベントへの参加のハードルの高さ

→申し込みなどの事前準備が必要であったり、過度な特別感が生まれてしまったりするため、イベントは参加ハードルが高い。

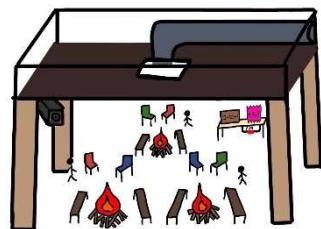
以上のことから、私たちは次のような提案をする。

原始×現代で創る交流の場『おはなし処@多摩』たまらんなんあ！！

1. アイデアの全体像 (What?)

● 焚火を活用した常設スポット『おはなし処』

私たちは『おはなし処』という、誰でも気軽に立ち寄れる多世代交流空間を創造する。この空間は、焚火を用いて人と人とのつながりを生み出すことを目標としている。半開放的空間で、仕事帰りなど通りすがりで立ち寄れるような、日常の動線上に常設する。



↑イメージ図

● 所々に現代技術を活用した原始的活動

天井付近にて定点カメラを設置し、焚火の様子を生配信する。生配信を見ることで事前にその空間の雰囲気を知ることができます。そのため、来場前の不安を軽減し、初めての人も安心して訪れやすくなる。尚、生配信では焚火のみを映し、来場者の顔は映らないよう配慮する。また、安全管理体制の強化として、運営者用デスクには警察や消防に直結する自動通報装置を設置する。これにより、万が一危険行為や火災等の緊急事態が発生した場合でも、速やかな対処が可能となり、利用者にとって安心・安全な環境を実現することができる。



↑生配信イメージ図

● 主体運営は徐々に拡大

開始初期の運営は本チームのメンバー {多摩大学附属聖ヶ丘高等学校 2年(2025年度現在)有志団体} で行う。その後経営が安定し利潤が生まれてきたら他組織にも運営側として協力を依頼する。

● 性別や年齢、職業に捉われない環境

この空間に訪れる対象者に制限はないが、1人でこの場に足を運んでくださる「お一人様」を歓迎する雰囲気づくりを目指す。それだけでなく週に1度「お一人様限定 day」を設け、より知らない人と会話する抵抗感をなくす取り組みも行う。

● 空間の工夫と新規性

構造：中央に焚火を置き、それを7人程で囲うように座る。そして、安全管理のため3方向に壁と天井を建設する。ただし、少しでもそこに入るハードルを下げるために出入口は置かないものとする。また、煙を排出するために天井に換気扇を置き、その上に屋根裏のようなスペースを設け、建物の横側から煙を排出する（図1はイメージ）。

設備：人々のリピート率を上げたり滞在時間を長くしたりするため夏は冷たい飲み物、冬は焼き芋やマシュマロ、温かい飲み物などを置く。

営業：初期は毎日(夏は19時～22時、冬は16時～19時頃までの)

3時間制で行う。その後人の確保ができるようになったら16時～22時ぐらいまでの6時間制にする。

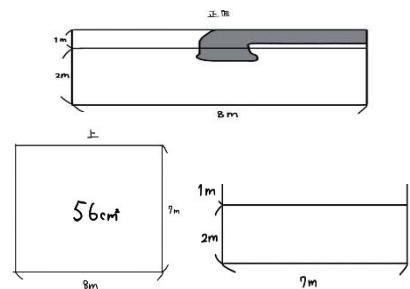


図1

● 集客方法

私たちはこの分野に課題を抱えている。集客方法の1つとしてSNSを用いた宣伝がある。しかし私たちには過去1年間別の活動（多摩大学附属聖ヶ丘高等学校の探究授業の一環）のPRを行ってきたにもかかわらず、十分にその知名度を広げることはできなかった。SNS運用による宣伝よりも効力のある集客方法を探している最中である。

● 期待される効果・インパクト

この空間は多世代が制限なく利用できるので、設置することによって人と人のつながりが増えることが期待される。独自アンケート調査によると、新たな人とのつながりが生まれることで、活力がうまれたり悩みを相談できる人が増えたりする利点があるとわかっている（図3）。

よって、この空間は人々にプラスの影響を与えることが期待できるといえる。

5. 人との関わりを増やすメリット



図3

2, アイデアの理由・根拠(Why?)

● 企画を実現させる意義

多摩市には、「はじめに」(p.1)で前述したような市民・地域と行政との新たな協働のしくみづくりという重点課題が存在している。図4でも分かるように多摩市が掲げる「協創」とは、①多世代、多分野における人々の交流を通して多世代共生型コミュニティを創ること、②地域課題の解決や町の新たな価値の創造を行うことである。私たちが提案する企画は対象者を制限していないため、多世代多分野での交流が可能となるすなわち、「協創」という目標に当てはまる。

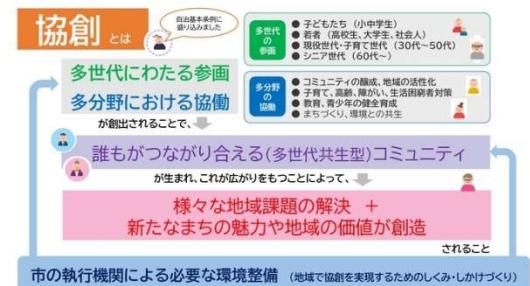
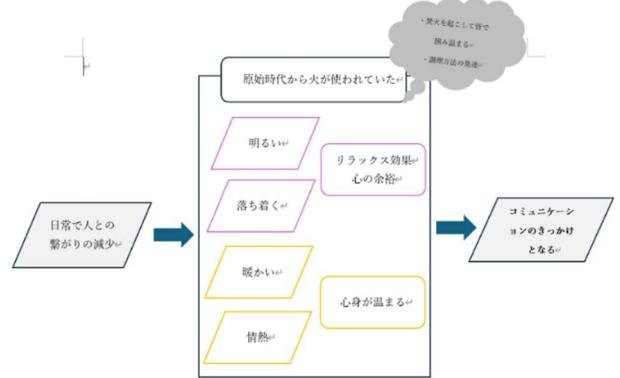


図4

● Q: なぜ火を使うのか。

- A. 1つ目に、大昔（旧石器時代）まで遡ると、人類にコミュニティが生まれたのは火のおかげではないかと考えられるからだ。例えば人類は、食事をするときは皆で火を囲んだり、自分たちの居住地では照明として利用したりしてきたⁱ。このようなことから、火には人間同士のつながりを強める力があると考えられる。2つ目に、時代が変化していく中でも火は変わらず人間の近くにあったからだ。現代でも花火大会やキャンプファイヤーなどは人気があり、開催されていると多くの人が集まってくる。その要因として、火にはリラックス効果がありⁱⁱ上の図に示すようなプラスの感情を抱かせることが考えられる。この2点を踏まえて私たちは、火は今も昔も人が自然と集まり関係を深められる重要なツールなのではないかと考えた。よって、今回の地域課題の解決手段として火は適していると私たちは考えた。

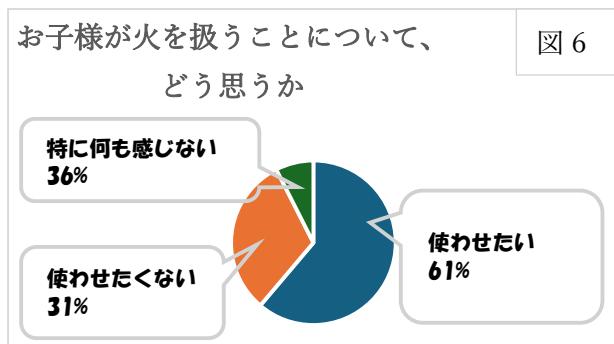
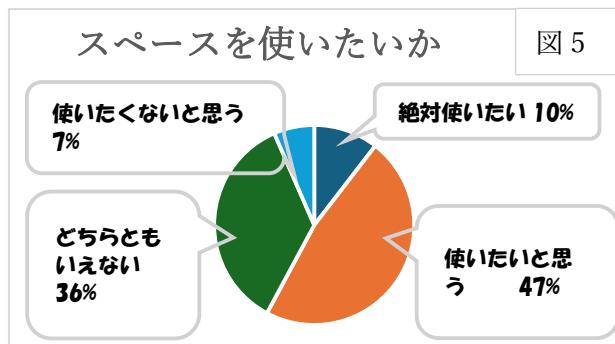


● Q: その空間があったら使いたい人はいるのか。

- A. 独自アンケート調査では、「絶対使いたい」、「使いたいと思う」が60%ほどを占めている(図5)。よって、この空間を利用したいと考える人は少なからず存在することがわかる。

● Q: なぜ対象者に制限を設けないのか。

- A. 独自アンケート調査で、自分の子どもに「火をたくさん使わせたい」と考えている親は全体の60%以上いることがわかる(図6)。これより、子どもにも積極的に火と関わってもらうために、スペースの利用者に制限は設けない。



- **①：なぜ常設にするのか。**
- A. この空間をイベントのようなものでなく常設にすることによって好きな時間に行けるため、イベントなどへの申し込みが不要となり参加ハードルを下げるきっかけとなる。また、仕事終わりなど同じ時間帯に訪れる人々と顔を合わせる機会が増えれば、継続的な人とのつながりを生み出すことができる。

● 類似企画との比較

- ・焼き芋たき火まつり (2025/12/11 多摩大学芝生広場にて) 多摩大学と、その附属高校である聖ヶ丘高等学校のそれぞれの有志団体がコラボレーションして実施した企画。年代関係なく焚火を数人で囲んでおしゃべりしたり、焼き芋やマシュマロを焼いたりして楽しめる。

参加者数：282名

参加費：無料

実施時間：13:00～17:00

制度：焼き芋1人1個まで無料、マシュマロのみ1個50円



- ・カワマチ BASE ~アウトドアオフィス~ (2025/12/18 多摩川河川敷芝生広場にて)

一般社団法人聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントが京王電鉄株式会社の協力のもと主催したイベント。テントや机椅子に加え焚火も設置しており、ふらっと立ち寄った人が1人で仕事をしたり友人とおしゃべりしたり、会社員同士で打ち合わせをするなどできる自由な空間。

参加費：無料

実施時間：11:00～16:00

制度：リバーサイドヨガ同時開催 (RIVER PARK 聖蹟桜ヶ丘主催)、キッチンカー2台出店 (DENDEN・焼きだん号)、ヨガ参加者には RIVER PARK 聖蹟桜ヶ丘で使えるラウンジ・ボルダリング1日利用券をプレゼント。



上記2つのイベントと比較すると、『おはなし処』は、主に営業方針においてメリットがある。

- ① 常設であるがゆえに毎日営業させることができる。

→イベントの開催に比べ空間の利用を習慣化しやすくなるという利点。

- ② 上記イベントは食べ物で料金が発生するのに対し『おはなし処』で扱う食べ物はすべて無料。

→子ども多くのお金を持っていない人でも金銭面を気にせずこの空間を利用できるという利点。

3. アイデア実現までの流れ(How)

1. 実現する主体

「主体運営は徐々に拡大」を参照(p.2)

2. 実現に必要な資源（モノ、カネ、ヒト）の大まかな規模とその現実的な調達方法

【モノ】

- ・この空間を作るために必要なものは多くはオンラインで調達するが、物によっては現地に出向いて調達する。
- ・駅に近い公園に設置（入口付近、奥に行きすぎない）公園を使うため、多摩市役所に相談して場所を確保する。

【カネ】

初期の段階では、主体運営が火の管理をするので、人件費はかからない。しかし今後人を雇うことになると、建設費、維持費に加え人件費が必要になり、合計でひと月にして 150万円前後の支出が想定される。また、利用者は多世代多分野なうえ、空間自体は狭く色々なものが目につきやすい。このことを利用して、壁で囲っていない場所に広告掲示板を設置し、そこに広告を出す。掲示板への広告出展料を主な資金源とし、さらに運営費補填のため、空間内に募金箱を設置し募金活動も行う。それだけでは不足するので、多摩市から補助金を受給する。

【ヒト】

火を扱うには、防火管理者及び火元責任者が必要である。

防火管理者：国家資格であり、その場にいなくてもよい。万が一火事が起った時に、初期消火のための指示だしを行う。法的な責任を伴う。

火元責任者：特に必要な資格はない。火元管理者によって指名され、常に現場にいなければならない。防火管理者からの指示を、現場にいる従業員に伝える「仲介者」の役割を担う。法的な責任は伴わない。

防火管理者は、現場にいなくても良いので、主体運営のメンバー（多摩市民）が資格を取得し、その役職に就くこととする。火元責任者に関して、初期は3時間稼働としているため、主体運営のメンバー間で日ごとに交代していく形をとる。その後、経営が安定し次第人を雇うこととする。他にも、薪、お菓子の仕入れや広告営業など様々な仕事が存在しているが、これらは主体運営のメンバーで役割分担をしながら進めていく。

3. 実現にいたる時間軸を含むプロセス

以下に記載する事項は、2026年1月を開始月と仮定したものである。

2026年いっぱい資金調達を行う。以下に示すプロセスと同時進行で進めることとする。

2026年1月～2027年1月：実験

論文(p.3)に火にはコミュニケーション増進効果があると明記されているが、これは実験の条件が①火がある場合と火がない場合 ②どの場合も女性同士 であるため、多世代多分野において火にコミュニケーション増進効果があるのかはわからない。よって、次の条件で実験を行う。

- a. 炉があり、火がついている / 炉はあるが、火はついていない / 炉がない（当然火もない）
- b. 初対面同士 / 知り合い同士 / 赤ちゃんを連れている（片方若しくは双方）
- c. 女性同士 / 男性同士 / 男女
- d. 本物の火を使う / 本物の火は使わない（偽物の火）
- e. 10歳未満 / 10代 / 20代 / 30代 / 40代 / 50代 / 60代 / 70代以上

→(a.b.c.d.e)を組み合わせて1パターンとし、実験していく。※1パターンあたり50分を想定。

これらの全2,304パターンをすべて実験する。

この実験を通して火のコミュニケーション増進効果を確認したい。

2027年2月～8月 準備+試験運用

実際にこの企画に需要があるのか、かつ何人程の人が集まるのかを知るために実際に稼働させる空間と同じ空間を用意し、5日間程の試験運用を行う。試験運用の時に必要になる物事をこの期間で準備する。土地・技術・資格・費用に関しては準備が難しいため、多摩市役所に協力を仰ぐ。

2027年9月～12月 土地の確保・資源調達

この空間を置くための土地の確保と実際に使う資源を調達する。

2028年1月～

稼働開始。

ⁱ 斗鬼正一, 2014, 「火というカオスと人」, 『江戸川大学紀要』24号

ⁱⁱ 松波晴人・羽生和紀, 2007, 「火のある暮らしの効用研究：暖炉によるコミュニケーション増進効果」, 『人間・環境学会誌』第10巻1号